



みつめよう つなげよう みんなの心
～児童生徒が自分らしく生きるための人権教育～

「わたしの名前の由来」

私の姓は「奥田」です。ご先祖様のお墓参りに行くと、墓石の姓は「屋」になっていることを子どもの頃不思議に思っていました。

「屋」から「奥田」に変えたのは私の父です。

父は昭和5年生まれで、戦後すぐに15歳で家族を支えるために大阪に出稼ぎに出ました。その頃、多くの奄美の人たちが、貧しい中、仕事を求めて都会に出ています。そのような人達にとって、自分が奄美出身であることはあまり知られたくなかったようです。

父は、大阪で結婚をして私が生まれる段階になって「屋」から「奥田」に名前を変えたということでした。

理由は、「私が、学校で恥ずかしい思いをしないように」ということでした。その理由は、ずっと大人になってから知ったことです。

父の心配をよそに、私は奄美に戻り教員生活を送ることになります。

その中で、奄美の「一字姓」の意味が分かり、父が姓を変えた理由が分かってきました。

父にとって、生活の貧しさや大阪での暮らしの中、一字姓は奄美出身者というレッテルを貼られているようで恥ずかしかったのでしょう。当時は奄美出身だと自慢して言える時代ではなかったようです。

ところが、父の心配をよそに、息子の私は奄美大島が故郷であることをずっと自慢をしていました。

そして、同級生達にも羨ましがられていました。

小学校4年生の時、社会科の調べ学習で私たちの班は奄美大島のことを調べ、発表しています。湯湾岳やクロウサギのことを私は始めて知りました。

先日、大阪で還暦の同窓会で会った友人がそのことを覚えていて、私が奄美で生活をしていることをとても喜んでくれました。

父の世代から上の人たちの多くは、奄美出身ということに対してコンプレックスのようなものが根強くあったのです。

でも、私は違います。今でも大阪の友人に、自分の故郷が奄美大島であることを自慢できます。そして、これから世界遺産に登録されると、自慢できる材料が世界中の人たちに知ってもらえるので、うれしく思います。

「風評被害の広がりが懸念される中で」

新型コロナウイルスに感染したことで、深刻な風評被害が発生しています。特に医療関係者に対する差別や偏見が関係者を追い詰めています。院内感染が起きた病院には嫌がらせの電話が相次ぎ、医療従事者の子どもが保育所に通えなくなるという事態も起きています。なぜ、このような悲しい出来事が起こってしまうのでしょうか。

確かに、緊急事態宣言が出された後、私たちの生活や行動には制約があり、我慢を強いられています。そこに、新型コロナウイルス感染への「恐怖心」が拍車をかけます。そのように追い込まれてくると、なぜか矛先を弱者である感染者やその関係者に向けて自分の生活圈や家族を守ろうとします。しかし、感染者や医療従事者の方々にも、私たちと同じように守るべきものがあるはずで、そのような状況の中でも、感染拡大防止のために、自分の命も顧みず、感染者の命を救うために必死になって働いている姿に思いをめぐらせば、真に敬意をもつことができるのではないのでしょうか。そう考えると、その中で起こってしまった感染は悪いことなのでしょうか？

クラスの子も私たちと同じ内容の新聞記事を読み合いました。私が記事を読み上げたあとに「このようなことをしてしまう人は自分が感染したらどうなるんだろう？」と考えていました。私もそう思います。

差別や偏見は、追い詰められたときやふとしたときに頭をもたげます。本当のことを知ろうとする人権感覚を研ぎ澄ませることで、このような事態が少なくなるのではないのでしょうか？感染拡大防止対策とともに今一度みんなで考えてほしいと思います。

〔生勝から望む夕焼け〕